フルマラソンの歩道から

1. 教育を考える一言

「残り10キロ、ここからは人生をかけて!」

2. 背景

マラソンの指導をしてくださった方の言葉です。つくばマラソンの 30 キロ地点に立てかけてあった段ボールに書かれていました。筑波大学では、「つくばマラソン」という授業が開講され、マラソンに向けて 1 年間に及ぶ指導と練習が行われます。その成果である本番で、マラソンの中で特に過酷だと思われる 30 キロ地点にランナーたちを激励するという意図で立てかけられていたと考えられます。マラソンはよく人生に喩えられます。この言葉は、まさにそのことを体験でもって実感させられる一言でした。

3. 考察

この言葉で教育を考えたときに気づくことは 2 点あります。 1 点目は、決断することについてであり、2 点目は言葉をかけることについてです。

マラソンに参加するにあたって、ランナーたちは本番に向けての準備を行います。その準備は、当日までの1日1日の積み重ねであり時間をかけて築き上げたものです。つまり、参加するにあたってランナーはすでに自分の中で築き上げた経験を背負っているのです。その成果を発揮するために本番に臨むのですが、そこでランナーはそれぞれの目標に向かって距離とタイムを積み上げていきます。そこまでの経験を背負って、目標を達成するかどうかの瀬戸際がマラソンの中で最も過酷であるといわれる 30 キロ地点で我々の前に訪れます。そこでは、自分が築き上げた経験を背負ったうえでの決断が迫られています。 マラソンの一局面ではありますが、それまでの自分を振り返り、現在の自分が置かれている状況を加味したうえで決断を下すということは人生における決断のすべてにつながってくることであるということが考えられます。

次に、なぜこの言葉が筆者に影響を与えたのかということについて考えてみたいと思います。30 キロ地点を迎えたときの筆者の状況は、筋肉や関節の硬直を感じ筋力的に疲労がピークをむかえ、休むか走り続けるかの間で精神的に葛藤が生じていました。その状況で、目にしたからこそ、決断を後押しする上での大きな影響を与えられたと考えられます。また、決断が完走を目指して走るという行動と結びついたことも重要です。決断と行動が直結するように適したタイミングで、より実感を持たせる言葉を選ぶことが、かける言葉の影響力を左右するということが考えられます。

参考文献

村上春樹『走ることについて語るときに僕の語ること』文春文庫、2010 年 クリストファー・マクドゥーガル著・近藤隆文訳『BORN TO RUN 走るために生まれた— ウルトラランナーVS 人類最強の"走る民族"』日本放送出版協会、2010 年